

岩井俊二

SHUNJI IWAI



TRASH BASKET THEATER



トラッシュ
シュ
バスケット・
シアター

自らの絵と文で綴った
初エッセイ

岩井俊二推薦

**カルト映画
全十六本!**

これは、
ボクの

辞典

と言っても
いいかもしれない



〈著者紹介〉

いわい・しゅんじ／1963年生まれ。宮城県仙台市出身。横浜国立大学教育学部美術学科卒業後、音楽プロモーションビデオやCD制作を手掛ける。91年、ドラマの脚本・演出活動を開始。テレビドラマ「打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？」で94年度の日本映画監督協会新人賞を受賞。その後、本格的に映画を撮り始め、代表作に『ラブレター』『スワロウテイル』がある。

©佐野 靖

トラッシュバスケット・シアター

平成9年10月1日 初版第1刷発行

平成9年10月6日 初版第2刷発行

著 者——岩井俊二

発 行——株式会社リクルート ダ・ヴィンチ編集部

〒105 東京都港区東新橋2-12-11 電池ビル7F
電話03-5472-8431

発 売——株式会社メディアファクトリー

〒104 東京都中央区銀座8-4-17
電話0120-169-005

印 刷——図書印刷株式会社
製本所

万一、落丁・乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。発売元宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。定価はカバーに表示しております。

©Shunji Iwai/Recruit Co.,LTD. "de Vinci" Div.
ISBN4-88991-475-7 C0074

Printed in Japan

岩井俊二

SHUNJI IWAI

トラッシュ
シュ

TRASH BASKET THEATER

江苏工业学院图书馆
藏书章

バスケット・シアター

自らの絵と文で綴った
初エッセイ

岩井俊二推薦

カルト映画
全十六本!

これは、
ボクの

辞典

と言っても
いいかもしれない



757

ISBN4-88991-475-7

C0074 ¥1500E

価格:本体1500円(税別)



1920074015009

発行/リクルート ダ・ヴィンチ編集部

発売/メディアファクトリー



ダ・ヴィンチ
ブックス

- * 『Love Letter』が生まれたのは『キングコング』のおかげ?
- * 岩井俊二が今までいちばん、他人に薦めた**珍品映画**とは?
- * ある朝突然閃いた『宇宙戦争』と
『ノストラダムスの大予言』の隠された秘密とは? ほか。

自らの映画の思い出を絵と文で綴った岩井俊二初のエッセイ集。
『ダ・ヴィンチ』での好評連載分に加え、執筆当時の楽しい裏話も満載。

SHUNJI IWAI TRASH BASKET THEATER



表紙・本文イラスト／岩井俊二
装丁／冨永浩二（ROBOT）
本文デザイン／市川事務所

『岩井俊二のトラッシュ・シネマ』 目次

ドラキュラ ————— 11

まぼろしの市街戦 ————— 19

ニュー・シネマ・パラダイス ————— 27

ドリームチャイルド ————— 33

ロレンツォのオイル ————— 43

猿の惑星 ————— 51

二十日鼠と人間 ————— 59

トレマーズ ————— 69



最終回

139

ACRI

133

父ありき

125

羊たちの沈黙

115

小さな恋のメロディ

107

危険な情事

99

キングコング

89

宇宙戦争

79



小学生のころ、日曜の正午に「サンデー洋画劇場」というのをやっていた。そのころは仙台に住んでいたのが仙台ローカルの話である。「サンデー洋画劇場」は当時人気のステイプ・マックイーンやアラン・ドロンをあんまり見かけない洋画番組だった。とりたてて興味はなかったが、時々楽しみだったのが「怪獣モノ」だった。野球のナイターが雨で中止になると東宝の怪獣映画が放映されるような時代である。映画に興味はなかったが怪獣は好きだった。

しかし洋画の怪獣というと「ゴジラ」のようなスターは見当たらず、サンリやアリの大きな奴とか、蘇ったティラノサウルス程度のオリジナリティーしかなく、おまけに人形をひとコマひとコマ動かしたぎこちない動き（あの技術をダイナメーションとか言うらしい。ダイノサウラへ恐竜）とアニメーションを合体させた言葉なんだ（そうだ）が子供心に興ざめだったが、それでもラヴストーリーよりは怪獣映画だった。

怪獣映画とは裏腹に大嫌いだだったのが怪奇映画だった。ドラキュラものとか枕言葉に「恐怖の……」がつく類の映画である。こいつらは子供の僕には正しく「恐怖」の一言だった。うっかり予告編を観ただけでもう背筋は凍りつき、僕は心の中でつぶやいたものだった。

やなもんを見ちまったぜ……とかなんとか。

そんな日は午後の釣りも虫捕りもなんだかノリが悪かった。でもこれだけでは済まないことを僕は知っていた。

そもそもサンデー洋画劇場の予告編はタブーだった。絶対見てはいけないルールがあった。うっかり見てしまい、それが怪奇モノだったりしたらもう手遅れなのだ。蛇女に石にされてしまうが如く、悪魔の呪いは既に我が体内に宿っている。それからの1週間僕は

ドラキュラの影郷で
当時は白人さんまで
怖かった。



やな予感に苛まれる。月曜の朝礼のときも給食の時間も。翌日になっても何やらそわそわした妙な感覚が拭えない。水曜日、木曜日、金曜日。そして週末が訪れ、暗黒の日曜日がやってくるのだ。

正午……テレビでは寄席をやっている。ちやぶ台を囲んで家族がゲラゲラ笑いながら見ている。裏番組ではドラキュラが人間の生き血をすすっている事実をこの家族は知らない。でも僕は内心ホッとしていた。黙ってみんなとお昼ご飯を食べてやり過ごせば事なきを得るからである。

ところがたまたま家族がいなかったとき、ひとりで留守番なんかしているような日曜の午後は最悪だ。裏番組のドラキュラがチャンネルを変えろ、変えろと僕に囁きかけてくる。よせばいいのに僕は誘惑に負けて恐る恐るチャンネルをひねると、果たしてそこには定番のクリストファー・リーが女優の首を噛んでいたのだ。

……またやってしまった。これで1カ月は悪夢にうなされるだろう。わかっているのにどうしても観ずにはいられないあの衝動は何だったのだろうか。

キドカラーの箱の中で血をすするクリストファー・リーの目は真っ赤に充血していた。目を強くゴシゴシこすってから撮影に臨んだのだろうか？ こないだ自分の撮影でブラッド・アイという眼球専用の血糊を使ったばかりだが、そいつを点眼した目玉の充血具合はギョッとするぐらい凄かった。クリストファーもブラッド・アイを使用していたのだろうか？ いや、どちらでもない。幼い僕にとって目の前で起きているこの出来事はもはや映画とリアルの区別さえなかった。

クライマックス、ヘルシング教授との対決でドラキュラは必ず負けることを僕は知って

